

## 大正期帝劇の「19世紀末バレエ」

山田 小夜歌（京都精華大学）

日本におけるバレエの黎明には帝国劇場(帝劇)が大きく関わっている。帝劇では1915(大正4)年にバレエ《人形の精》の翻案《三越呉服店玩具部》が、1916(大正5)年に《エクセルシオール》の翻案《昇る旭》が上演された。これら帝劇の上演作品と既存の古典バレエとの関連は以前から指摘されてきた(上野1992ほか)。にもかかわらず、《三越呉服店玩具部》や《昇る旭》におけるアダプテーションや舞台の内容が十分に議論されることはなかった。すなわち、帝劇歌劇部に招聘されたイタリア人舞踊家ジョヴァンニ・ヴィットリオ・ローシーが同部員のバレエ指導にあたり、彼の在英中の活動拠点だったヴァラエティ劇場に通じる多彩な上演活動を展開したことが明らかにされる一方、19世紀末ヨーロッパの大歌劇場で創造された古典バレエ作品が大正日本で翻案上演されたことには、さして関心が払われてこなかったのである。それどころか、日本における古典バレエ作品受容の端緒を大正後期以降来日した白系ロシア人の活動に求める見方も多く、翻案上演の事実さえ闇に葬られている感が否めない。

本発表では、まず《三越呉服店玩具部》《昇る旭》の絵本筋書と上演評をもとに、原作がどのようにアダプトされたのか、作品の実態を可能な限り明らかにすることを試みる。原作たる《人形の精》(1888年ウィーン)、《エクセルシオール》(1881年ミラノ)は、いずれも初演直後から大きな反響を呼び、ヨーロッパを越え世界各地に派生して上演が重ねられた。「寓意的・歴史的・夢想的バレエ」との標題が付けられた《エクセルシオール》は、「科学」「進歩」といった近代主義を表象するスペクタクルである。また、振付家マンゾッティが「王国のPRマン」と称されたように、国家統一後の混乱に揺れるイタリアでナショナリズム形成に独

自の役目を担った。国家主義とは無縁の主題にみえる《人形の精》にも、登場人物や人形の属性設定には多民族国家たるオーストリア＝ハンガリー帝国の社会秩序保持への配慮が見てとれる。他方、宮廷歌劇場の厳格な階級意識のもとで創られた同バレエには、19世紀半ばパリを中心に栄えたロマン主義バレエの残像が投影されていることも指摘される。このように同二作には、製作された国家特有の政治的・社会的・文化的事情が色濃く映し出されており、その翻案作品は上演する国や地域の主義・概念・趣向に沿ったかたちで改められた。本発表では帝劇での事例を分析するにあたり、ローシーが来日前に滞在した帝国主義国・英国におけるアダプテーションとの比較を交えて考察する。

また、同二作が帝劇という「近代的劇場」で翻案上演された点にも注目したい。とりわけ近年、これらのバレエと各劇場の照明技術の発展や劇場における社交行動との影響関係、あるいは作品における「電気」表象の意味について様々な分析が進められている(古後2021ほか)。劇場照明の進化は日本演劇史の文脈でも転換点として捉えられ、とくに舞台照明における真の近代ともいわれる調光器を導入した帝劇という場での同作上演の意味についても追及する。以上の視点も踏まえつつ、《人形の精》と《エクセルシオール》の帝劇における翻案上演を、初演版の上演背景および他国でのアダプテーションの事例と並べて検討することで、日本へのバレエ移入を世界的なバレエ伝播と系譜からあらためて捉えなおす契機としたい。

### 【参考文献(抜粋)】

上野房子「日本初のバレエ教師 G.V.ローシー：来日前の歩みを探る」『舞踊学』14、1992、1-11頁。  
Pappacena, Flavia(ed.) *Excelsior: Documenti I Saggi*, Rome, Di Giacomo, 1998.  
古後奈緒子「世紀転換期のバレエにおける人形と電気の主題：ヨーゼフ・ハスライター作『人形の精』を中心に」『大阪大学大学院文学研究科紀要』61、2021、103-123頁。